

相談援助実習に関わる自己コンピテンス・アセスメントの活用と課題

○吉備国際大学 松原 浩一郎 (2890)

キーワード：コンピテンス・アセスメント、実習評価、実習教育

1. 研究目的

実習教育における評価は、実習前評価と実習中の評価および実習後の評価が単位付与の形で教員がその責任で行うのが一般的である。しかし、学生が自己の学修状況や習得状況を理解し、さらなる学修の深化をはかるためには、学生自身が評価の主体となり自己の現状を振り返り評価をする自己評価が有効である。自己評価は、学生個々の学修意欲の向上や、学修課題の明確化にも役立つ。

そこでこの研究では、相談援助実習に関わる学生の自己評価をいかに実施し、しかもそれを実習教育にどのように活用すべきかを検討し、その課題も含めて明らかにすることを目的とする。くわえて、自己評価の結果をどのように学生自身が振り返りをして、それを事前学修・実習・事後学修に活かすかということも検討する。なおここで言う実習前後の学修とは、相談援助実習指導と相談援助演習である。

2. 研究の視点および方法

学生の自己評価については、北星学園大学において作成された「自己コンピテンス・アセスメント」※1（以下シートと言う）を用いる。そしてこのシートを吉備国際大学社会福祉学科の学生に使用させた結果を分析・検討する。このシートは、大項目として「Ⅰ実習へ臨む自己の姿勢」「Ⅱ実習に必要な技術の側面」「Ⅲ実習に必要な知識の側面」の3つに分けられている。さらに中項目としてⅠは5項目、Ⅱは11項目、Ⅲは10項目に分かれていて、その中に小項目があるものとなないものがある。また回答は、7段階の評価基準の設問と5段階の設問がある。くわえてすべての質問項目にコメント欄が設けられている。吉備国際大学においては、相談援助実習を履修希望する9名の学生に、このシートを用いて同じ内容で合計4回の自己評価を実施した。まず相談援助実習指導1においてに第1回目（2011年9月：相談援助実習1年前、通常2年生の秋学期）の自己評価を実施し、引き続いて同教科の最終講義において第2回目を実施した（2012年1月）さらに相談援助実習指導2の最終講義（同年7月：相談援助実習直前）に第3回目を実施して、夏休み中（通常は3年生）に実施される相談援助実習終了後、相談援助実習指導3の最初の講義において第4回目のシート記入を行った（同年10月）さらに引き続きこの講義で4回のシートの総合的な振り返りをした。これに呼応して「実習後課題設定・課題解決シート」を用いて今後の自己課題を明確化し、その解決に向けた取り組みを行った。また、1回目のシート記入後「相談援助実習に臨むための自己課題と解決方法記入シート」を用いて、相談援助実習までのスキルアップを目指した。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて処理している。学生個々のコンピテンス・アセスメントの結果を本学会において発表することについての承諾も得ている。

4. 研究結果

今回は、シート4回の数値の変化について分析した結果を中心に研究報告をする。ただしIの自己の姿勢を問う設問では、声の質が高いか・低いか？どちらに傾くか、というような内容のものもあり、これについては優劣の区別をすることができないので、分析から外している。

詳細は学会発表において資料を提示して述べるが、ここでは若干の分析結果を明らかにする。まず「I 実習へ臨む自己の姿勢」の項目について分析する。中項目5つの設問で1回目の評価より4回目マイナスになった学生が各設問複数人いる。その中で唯一「自己が他者に与える印象を分かっていますか」という設問のみマイナスになった学生はいなかった。しかし「II 実習で必要な技術の側面」においては、マイナスになったのは「利用者の様子を観察することができる」が1人と「基本的人権について考えることができる」が2人のみで他の9つの中項目にはマイナスは見られなかった。一方「III 実習で必要な知識の側面」については10の中項目で5つの項目がそれぞれ一人ずつマイナスになった学生がいた。反対に一人もマイナスにならなかった項目は、Iではゼロで、IIでは3つ、IIIでは2つの設問であった。この結果から、技術の側面は分析をするのに可視化しやすいことや実践において実際に活用する経験を持ちやすいことなどが理由で、後の回答のほうが高い数値を示したものと思われる。一例を挙げると「利用者の現在の生活状況をアセスメントできる」という設問とそれに付随する小項目の4つの設問にはいずれの学生も高い自己評価をしている。また「地域の視点から実践できる」という中項目とそれに付随する4つの小項目の設問にも高い評価をしている。これは相談援助実習を経験したことによるレベルアップの結果だといえよう。しかし反対に、相談援助実習が終了した時点で記入した4回目のシートの評価が、実習前に記入した3回目のシートよりも下がった項目もあった。これについては特にその理由を回答するようにしたので、その結果は学会発表において明らかにする。

また「実習後課題設定・課題解決シート」「相談援助実習に臨むための自己課題と解決方法記入シート」の活用とその有効性についても発表で明らかにする。

5. 考察

シート自体の有効性については、今後相談援助実習の評価項目に添った内容に変更する必要がある。また、自己評価結果を踏まえて学生自身が課題設定できるような教材の開発・充実に取り組む必要もある。そして、それを相談援助実習と相談援助実習指導および相談援助演習との連携に活用することが有効である。

※1 北星学園大学社会福祉学部編『2010年度版 社会福祉実習実施要項』132-136